主日礼拝説教「あなたも神の愛する子」予稿

日本基督教団石神井教会　2022年1月9日

【旧約聖書日課】出エジプト記　14章15～22節

15主はモーセに言われた。「なぜ、わたしに向かって叫ぶのか。イスラエ
ルの人々に命じて出発させなさい。16杖を高く上げ、手を海に向かって差し
伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾
いた所を通ることができる。17しかし、わたしはエジプト人の心をかたくな
にするから、彼らはお前たちの後を追って来る。そのとき、わたしはファラ
オとその全軍、戦車と騎兵を破って栄光を現す。18わたしがファラオとその
戦車、騎兵を破って栄光を現すとき、エジプト人は、わたしが主であること
を知るようになる。」19イスラエルの部隊に先立って進んでいた神の御使い
は、移動して彼らの後ろを行き、彼らの前にあった雲の柱も移動して後ろに
立ち、20エジプトの陣とイスラエルの陣との間に入った。真っ黒な雲が立ち
こめ、光が闇夜を貫いた。両軍は、一晩中、互いに近づくことはなかった。
21モーセが手を海に向かって差し伸べると、主は夜もすがら激しい東風をも
って海を押し返されたので、海は乾いた地に変わり、水は分かれた。22イス
ラエルの人々は海の中の乾いた所を進んで行き、水は彼らの右と左に壁のよ
うになった。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一　5章6～9節

6この方は、水と血を通って来られた方、イエス・キリストです。水だけで
はなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証し
する方です。“霊”は真理だからです。7証しするのは三者で、8“霊”と水と血
です。この三者は一致しています。9わたしたちが人の証しを受け入れるのであ
れば、神の証しは更にまさっています。神が御子についてなさった証し、こ
れが神の証しだからです。

【福音書日課】マルコによる福音書　1章9～11節

9そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから
洗礼を受けられた。10水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように
御自分に降って来るのを、御覧になった。11すると、「あなたはわたしの愛
する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

《洗礼》から始める【こども説教のために】

「待降節（アドヴェント）」から飾り始めたクリスマスの装いは、先週の１月６日「公現日（エピファニ）」に、すっかり片付け、通常の装いに戻りました。「公現日」は、幼子としてお生まれになられた御子イエスが、わたしたちの世界にそのお姿をはっきりと現わされたことを記念する日です。

幼子の誕生は、特別な家柄にでも生まれない限り、広く知られるわけではありません。わたしたちは皆、両親のもとで守られて育つ間は、家族や限られた人の間だけで知られていたのです。成長するにつれて、幼稚園や保育園、学校といった新しい生活の場を広げ、少しずつ知られる人が増えていくのです。幼子としてお生まれになられた御子イエスも、両親のもとにいらっしゃった間は、多くの人に知られる者ではなかったでしょう。

御子イエスが世界の人々にその姿を知られるようになったのは、東方の学者たちが訪れ、幼子を礼拝したときからだと、考えることもできるかもしれません。「公現日」に、西方教会では、東方の学者たちの来訪を記念してきました。けれども、東方教会では、同じ日に、別のことを記念してきました。御子イエスの洗礼の出来事です。主イエスは、ヨハネから洗礼をお受けになられたときに、世界の人々の前にその姿をはっきりと現わされるようになったと考えたのでしょう。

主イエスは、「洗礼者」と呼ばれるヨハネから洗礼をお受けになられました。ヨハネは、多くの人々が神に背を向けて生きていた時代に、神のほうに向き直り、神のもとに立ち帰って生きるようにと、人々に悔い改めを説いていました。悔い改めのしるしとして、洗礼を授けていました。水に体を沈めて、あるいは水を体にかけて、これまで犯してきた罪や汚れを洗い流し、清めて、神の御前に立つようにと教えていました。主イエスも、そのヨハネのもとに行き、洗礼をお受けになられたのです。

ヨハネから洗礼を受けた人は、少なくありません。その中で、主イエスだけが特別、目立っていたのでしょうか。そういうことは、なかったと思います。ただ、主イエスは、洗礼を受けられたとき、神をご覧になられていました。神が聖霊をお送りくださり、「あなたはわたしの愛する子」と告げてくださるのを、聞き取られていました。

主イエスは、弟子たちに、同じ洗礼を受けるようにお教えになられたのです。わたしたちも、主イエスと同じ洗礼を受けます。神が聖霊をお送りくださり、「あなたは神の子」と告げられる洗礼です。それは、わたしたちが、主イエスと同じように、世界に知られる一人になることなのです。教会は、洗礼を授けられた人が世界に知られる貴い「神の子」の一人であることを、知っているのです。

「水の中へ！」

教会の営みには、だれもが招かれています。礼拝でも集会でも、あるいは互いの交わりでも、だれかが拒まれるということはありません。もちろん、本人が拒んでいるのに無理強いするようなことはありませんが、そのような人でさえ、教会がお招きしようとしている一人であることに違いはないのです。

前任地の教会にときどき来られていた人で、あちらこちらの教会で「出入り禁止」を言い渡されているという青年がいました。素朴な青年でしたが、人間関係を築くのが上手ではなく、行った先のどこの教会でもトラブルを起こすようなことを繰り返していたのです。本人曰く、「あの教会でも、この教会でも、牧師に出入り禁止を言い渡された」と言っていましたが、本当に教会が出入り禁止を言い渡していたのかは分かりません。年に数回、定期的に開かれていた地域の超教派の牧師・司祭の集まりでは、その青年のことを知らない者がいませんでしたから、教会という教会に出入りしていたのは事実なのでしょう。そして、本人は、いくつもの教会で自分は拒まれたと思っていました。それでも彼は、最終的に、ある教会で洗礼を受け、信者になりました。その教会の司祭が自分を受け入れてくれていると、納得がいったからです。その後も、あちらこちらの教会に出入りしていましたが、かつてのようにすぐにトラブルを起こして、「出入り禁止にされた」と訴えるようなことはほとんどなくなったのです。かつてトラブルを起こした教会でも、彼のことを、洗礼を受けた一人の信者として受け入れるようになったのです。

教会には、洗礼を受けた信者も、未受洗の信者でない方も、おいでになられます。責任を伴うことでなければ、区別はされません。ですから、長く教会においでになられ、礼拝にも出席されているのに、洗礼を受けないままでいるという方も、時折いらっしゃるのです。それでも構わないのです。

けれども、そのような方のことも、わたしたちは、洗礼へとお招きいたします。洗礼を受けることは、その人が、わたしたちの間で、「神の子」の一人としてはっきりと知られるようになることだからです。

主イエスがヨハネから洗礼を授けられたとき、神の御前に立つ者として「あなたは神の子」と宣言されたように、わたしたちは、教会で一人の人に洗礼が授けられるとき、その人が確かに神の御前に共に立つ一人であることを知り、「神の子」の一人と認めるようになるのです。「神の子」として生きる者の世界、「神の国」の一員として、その人が忘れられることはありません。

洗礼の水は、いつも教会に備えられています。洗礼の水の中へと、わたしたちは招かれてきました。そして、この水の中へと、どなたのこともお招きしたいのです。それは、「神の子」として新しく生まれる水なのです。

水の中から！

もちろん、わたしは、何も強いようとしているわけではありません。わたしたち信者の一人ひとりに洗礼を受けることになった理由があるように、まだ受けないでいる理由もそれぞれにあるのです。そこには、神のお考えもあるでしょう。それを覆して洗礼に至ろうとしても、ことは進みません。

それでも、皆さんに知っていただきたいのは、これは、わたしたち一人ひとりの自分一人の問題であるというよりは、神の問題である、ということです。神が一人ひとりをどこに導き、どこに向かわせようとされているのか。

モーセの時代に、エジプトから導き出されたイスラエルの人々は、海に向かわされたのです。彼らは、海に向かうしかありませんでした。向かった先には、海の水が立ちはだかっていました。振り返れば、追っ手が迫っています。もはや、後戻りすることはできません。戸惑い、立ち尽くすイスラエルの人々は、ただ神に向かって助けを求め、声を上げるだけでした。その人々に対して神が命じられたのは、前に向かって進むことでした。眼前に立ちはだかる海の水の中へと、入っていくことでした。

それは、もちろん、水の中に沈んでしまうためではありません。その水の中を通り、その水の向こう側へと、水の中から進み出るためなのです。水の中から出で立った先にこそ、天から与えられるパン（マナ）が備えられ、岩からほとばしり出る泉があり、御心を知るようにされる「石の板」の与えられるところがあるのです。

主イエスがヨハネから洗礼をお受けになられたとき、水の中に進み入られるまでに何が起こっていたでしょうか。主イエスの身に新しいことが起き始めたのは、洗礼の水の中から上がられてからでした。水の中から上がられるとすぐに、主イエスは、神の聖霊が降ってこられることを知り始められたのです。「あなたはわたしの愛する子」と告げる神の御声を聞き始められたのです。そこから、主イエスの歩みが始められました。弟子たちを伴い、罪人と呼ばれる人々と共に生き、人々の命のために自らを十字架の死に引き渡されることになる道が、始まったのです。

これは、神のご計画されたご事業なのです。わたしたちが、すべての人のことを「神の子」として知るようになるまで続く、遠大なご事業です。すべての人が「神の子」として知れた者として、この世に与えられた命を全うすることができるようになるまで続く、「神の国」の建設事業なのです。この大事業に、わたしたちは招かれてきました。水の中に進み入り、このご事業に与らせていただく者とされてきました。わたしたちの家族も、友も、周囲の者も、この水の中へと招くためです。彼らを「神の子」として知るようになり、彼らが「神の子」と知られた者として生きるようになるためです。